

---

# 極夜

奏多

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

極夜

### 【Nコード】

N3467E

### 【作者名】

奏多

### 【あらすじ】

ある一夜で、人生を狂わされてしまった美月。家族も会社も、自分の名前さえ捨てた彼女に待ち受ける未来は……？

## Missiono:プロローグ

深夜の市ヶ谷を、一人足早に歩く。

身に纏った黒いロングコートが、漆黒の闇に溶け込む。

コートの裏には、護身用の拳銃が息を潜ませている。

無論、警察ではないし、いわゆる違法の代物だ。

瀬名美月。

数月前までは、昼間の世界に生きていた。

会社に勤め、流行の服や化粧を研究し、彼氏もいる。

そんな生活があたり前に思っていた。

なのに、まさか自分が、こんな闇社会に生きるようになるとは……。  
…。

コートの内側に手をそっと入れ、拳銃に触れる。

重たい黒い塊が、妙な冷たさをもっていた。

自分の足音と息遣い以外は、何も聞こえない夜道。

午前2時をまわると、さすがの市ヶ谷も息を潜める。

すつと路地に入り、立派な建物に吸い込まれるようにして入っていく。

夜の闇と同化して、グレーの質素な色が、さらに漆黒に紛れている。

私がこの”Night Mare”に呼ばれたのは、ほんの数カ月前的ある夜だった。

私はある罪を犯し、警察からも国民からも追われる身になった。

なるはずだった。

あの夜、私を匿うかわりに手を貸してほしいと言われた。

そして、私は秘密結社NIGHT MAREの、エージェントになった。

助かりたかった。

守りたかった。

家族を。友達を。彼との思い出を……………。

たとえ自分の存在が、この世から消えると知っていても……………。

## Mission 1: 罪 - 1

あの日は、雨が降り続いていた。

私には、アパートで同棲していた恋人がいた。

日常生活は本当に充実していて幸せで、いつかこいつと、結婚しちやうんだろな。…とか、蓮司の顔を見るたび漠然と考えていた。

しかしたった一つだけ、交際を回りに祝福されない深刻な悩みがあった。

恋人の蓮司は、いわゆる『よろしくない』人で、なかなか危ない橋を渡って来たような男だ。

風貌も、普通の人ならお近づきになりたくないカンジだ。

少し童顔な顔なのに無理矢理3つも4つもピアスの穴をあけ、少し茶色がかった髪をワックスでガチガチに固めあげ、顔には少し似合っていない黒いスーツにシルバーのネックレスが光っていた。

頑張って大人に見せてる感ありりだった。

当時私は大手の外資系の会社に勤めていて、誰もがうらやむエリート街道を地で歩いているような経歴だった。

想像を絶するカップルだが、私は誰に何と言われようと、蓮司が好きだった。

クールな中にも優しさが潜んでいるような蓮司を、たまらなく愛していた。

彼も外見に反して、私を傷つけることなんて一切しなかったし、不器用ながらも大切に扱ってくれていた。



まさかあんなことが起こるなんて、1ミクロだって想像してなかった……………。

「お帰り！ご飯できてるよ」

アパートのドアが開いて、雨の中、ずぶ濡れの蓮司が帰って来た。

だいぶ疲れた様子で、青ざめた顔をこっちにむけ、突然口を開いた。

「……………美月……………愛してる」

「へ、やだな、何よ突然……………」

「……………いや、何となく」

今思えば、クールな蓮司のあんなに取り乱した様子に、どうして気付くことができなかったのだろうか……。

蓮司の言葉に舞い上がってた私は、私を見つめる切ない瞳に、全く

気付かなかった

……。

## Mission 1: 罪 - 2

夕飯を食べ、ワインを飲んだあとも、蓮司はどこか様子がおかしかった。

しかし私は何も気付かず、今日職場であったことを面白可笑しく話していた。

今日課長の不倫相手が乗り込んできたのよ、とか

来週同僚の真由美と飲みに行くから帰り遅くなるから、とか

本当にたわいもない話。

それをいつも以上に微笑みながら聞いている蓮司に、

私は完全に、舞い上がっていた。

深夜を過ぎ、蓮司は寝室に入ってしまった。

私は週末の蓮司とのデートプランをたてながら、のんきに皿洗いをしていた。

と、水の音で聞こえなかったのか、気付けば蓮司が背後に立っていた。

「どうしたの？寝れない？」

水を止め、手を拭きながら振り返る。

次の瞬間、私は信じられない光景を目にした。

蓮司の浅黒い腕が私の方へ延び、指が私の首を掴んでいたのだ。

「ちよ、何するの?!」

叫ぶと、指に力を込める蓮司。

今起こっている状況が理解できず、ひたすら蓮司の触り慣れた指をひき離そうとした。

蓮司の目に涙が浮かんでいたが、私は必死で何も気付かなかった。

「やめて!」

力いっぱい振りほどこうとすると、蓮司がフツと力を抜いた。

その隙をついて逃れた私は、激しい息遣いのまま蓮司を睨んだ。

「……冗談にしては、キツすぎるよ……」

無理矢理笑おうとした私に、再び蓮司が手を延ばしてきた。

私は恐怖で声も出ず、無意識に台所に逃げると、追いかけて来た蓮司の腹に、無我夢中で持っていたものを突き刺した。

## Mission 1: 罪 - 3

自分の手についた赤黒い液体をみて、それが蓮司の血であり、自分が持っているのは包丁であることを、瞬時に悟った。

「うそ……………蓮司……………」

包丁を持つ手が柄から離れ、蓮司は床にゆっくり倒れた。

「蓮司!……………私、何てこと……………」

パニックになって泣きじゃくる私の頬にそっと触れながら、蓮司は微笑んだ。

「……………ビビらせて……………ごめんな。……………俺、美月を殺そうなんて、思ってたかった……………」

「だったら、なおさら私のせいで……………」

「泣くな……………俺、銃の密輸をやってたんだ……………。《D》って  
いう組織と組んでた……………」

息も絶え絶えになりながら必死で話そうとする蓮司。

もうしゃべらないで、という私の言葉も無視し、私の手を握りしめながら話し続ける。

「……………けど、今日《D》のところに行ったら、俺を口封じで消すって、話してるの聞いちゃまって……………。俺といたら、美月まで狙われるにちがいない。……………そう思って……………」

「けど、美月見ると、俺からはどうしても別れを切り出せなかった……………。だからこういう風にすれば、美月も……………別れてくれるかなって……………」

衝撃のあまり口のきけない私は必死で、そんなことない、と首を振り続けた。

そんな私の涙を、蓮司は震える指でそっとすくった。



「逃げる……美月……。《D》には、絶対に関わるな……。俺のことを聞かれても、知らないフリをしろ……」

外では雨が、激しく窓にうちつけていた。

「いや……私もここに残る！それがダメなら自首する！」

「ダメだ。……これだけは、言っとく。……俺は、お前に刺されたのは全く恨んでない。……《D》に殺されるより、マシだ……」

私の目から落ちた大粒の涙を笑って拭いた。

「……こんな奴で、ごめんな。……愛してる、美月……。……鞆に、箱が入ってる……。貰ってくれ……」

鞆を開けると、白い箱があった。それを開くと、ダイヤの指輪が入っていた。

「…………蓮司……」

「…………早く行け……」

「蓮司……」

「早く……!」

蓮司の指輪を嵌めると、蓮司の唇にそつとキスをし、涙が流れるままに部屋をあとにした。

愛しい恋人の後ろ姿を、この上ない優しい表情で見送った蓮司は、静かに包丁を握りしめ、自らの体を貫いた。

## Mission 2 : 逃亡 - 1

雨の中、傘もささずに走っていた。

濡れた髪が顔にへばりついて、全く気にしなかった。

自分の手で、最愛の人を、殺した。

蓮司の笑顔や、楽しくしゃべりながら二人でコーヒーを飲んだ夜。  
夜景を見ながらキスした、遊園地の観覧車……

愛しい人と楽しく過ごした思い出が、走馬灯のように頭の中を駆け巡る。

「……………蓮司……………」

ひたすら走り、やがて力尽きて地面にへたりこんだ。

頭の中は、蓮司のことだっばいだ。

やっぱり自首、しよつか……。

目の前の交番を、ぼんやりと見つめていた。

ちょうどその時。

《パンッ》

鋭い銃声と共に、右腕に激しい痛みを感じる。

辺りを見回すと、たくさんの男がこちらへ銃口を向けながら走ってきていた。

直感的に危険を感じ、残っていた力を振り絞って走った。

背後で聞こえる銃声は、時折私の頭を真っ白にし、私の足は恐怖で今にも動かなくなりそうだった。

路地裏に入った瞬間、私と奴らの間に誰かが立ちはだかった。

「……………」

「そこに私の車が停まっている。乗れ」

「え？」

「早く。殺されたいのか」

それだけ言うと、銃をかまえて奴らに発砲した。

銃声を聞きながら指さされたほうへ走り、停まっていた車に近寄った。

「すみません！開けて！」

殺されたくなかった。

もしかしたら奴らの仲間なのかもしれないのに、私はなぜかさっきの彼を信じて、ひたすら窓をたたいていた。

## Mission 2 : 逃亡 - 2

車の窓が下がった。

「た、助け、て」

残る力を振り絞り、車体にしがみつく。

黒い車の窓は特殊加工されていて、外からは中の様子が全くわからなかった。

「助け……」

「レイ様から伺っております。どうぞ中へ」

ドアが開かれ、中の人物が手招きした。

私は助かりたい一心で、知らない車に乗り込んだ。

そのとき、私の運命の歯車は、見えなくらい微妙に、しかし確実に、ずれて動き出した。

「出して」

低い、少し威圧感さえ感じられる声に命じられ、車はゆっくりと前に進み出した。

「あの……さっきの若い男の人、置いていっていいんですか？」

私が怖ず怖ずと話し掛ける。

「そう命令されました。あなたは何も心配せんでよい」

隣に座っていたのは、黒いスーツを纏った初老の男性だった。



「……ありがとうございました」

「命令だから従った。それだけです」

何でこんな年配の人が、あんな年端もいかない人の命令を忠実に守るのだろうか。

さっきの人は、それほど力のある人なのか……？

「……今から『本部』に連れていきますので、守秘義務のため目隠しをさせていただきます」

『本部』……？

私、一体どこに連れていかれるんだろう……？

しかし、さっきの恐怖から抜け出れた安堵感から、力が抜けてふいに涙が出てきた。

「……蓮司……」

涙を拭う力もはや残されておらず、ただひたすら左手に光る指輪を握りしめて涙を流していた。

「……早く泣き止みなさい」

隣にいた初老の男性が、落ち着いた声で言った。

この一時間あまりの出来事から受けたショックから、涙を止めるなんてもはや不可能だった。

うずくまったまま頭を振ると、隣から電話をかける声が聞こえた。

「……もしもし……はい、さきほどの女性ですが……ええ、目隠しも無理だと……はい……はい、わかりました」

ピツという電話を切る音とともに、こちらへ向き直る衣擦れの音がした。

「レイ様の許可がありましたので、目隠しは控えます。ただし、許可するまでそのままの姿勢でいてください」

うずくまったまま頷くと、彼は小さく溜息をついて口を閉じた。

私は、これからどうなるんだろう……。……。

## MISSION3…出逢い-1

建物の中は、薄暗いオフィスのようだった。

明るい社内、が売りの、今勤めている会社とは全く違っていた。

……会社……どうなるんだろう……。

私、自首しなくていいのかな……？

蓮司を刺しておいて、自分だけ助かりたいなんてムシのいい話、あるわけない。

むしろ自首したいくらいだ。

「レイ様がお戻りになるまで、こちらでお待ちください。今お茶をお入れします」

「あの……っ」

思わず声をあげてしまった。

「……はい？」

「あの、私、自首しないでいいんですか?! ひ、人を刺したのに……」

自分で言いながら、自分がやった事実があまりに恐ろしくて、目が潤んできた。

そんな私にも彼は表情を変えることなく、

「レイ様にお話してください。そういった話は私の一存では何ともできませんので」

そう言うと、彼はティーカップを置いて部屋を出ていった。

何も口に入れる気になれず、ひたすら部屋を見回していた。

目を閉じると、蓮司を刺したときの感触や光景が体に蘇ってくるから……

1時間ほどして、部屋の扉を開ける音がした。

身構える体力も精神力もなく、ただ顔を音のした方向に向けたただけだった。

入ってきたのは、さっき路地で見た男だった。

黒いスーツにストライプのシャツ。

ネクタイのない彼の恰好は、歌舞伎町にいるホストと言われても納得してしまうようなものだった。

黒い髪に……寂しげな、だけどキレイな瞳。

私を一瞥した彼は、その端正な顔を崩すことなく、窓辺へ寄って外の風景を眺めた。

何も言わずに煙草をはさみ、火をつけた。

その少し伏し目がちの目に前髪がかかり、なんだか妖艶で危険な香りを放っていた。

あんまり黙ったままだったのでいたたまれなくなって、私は口を開いた。

「あの……」

「名前は」

私の声に被せられた声はやっぱり妖しい響きをもっていて、戸惑った。

「は……」

「名前は何だ」

「……茅島美月ですけど……」

そつ口にした瞬間、その男の顔は驚愕の表情に変化した。

慌てて煙草を灰皿に揉み消し、こちらにゆっくり歩み寄ってくる。



「何といった……?」

じりじり近づいてくる彼とは逆に、少しずつ後ずさる私。

「茅島美月です……けど……」

”カヤシマミツキ”?! お前、今そう言ったのか!?”

彼のキレイな瞳に、私が映る。

「それがなんなんですか……」

わけもわからず壁まで詰め寄せられる。

彼も彼で、わけがわからないというような顔をしている。

一体なんなの??

M i s s i o n 3 … 出 逢 い - 2

「……………すまない」

彼の体が遠のき、私は思わずその場へたりこんだ。

向こうでは、必死で頭を振っている男の姿。

「……………申し遅れた。私が、N i g h t M a r e 代表取締役の、東堂レイだ」

ないともあ……………？代表取締役？……………社長？？

「一言で言つと、闇社会の組織だ。こつちの世界では、『黒』と呼ばれている」

……………闇社会！？

そんな危なげな組織のトップと、同じ部屋にいるなんて……

一気に顔から血の気が引いた。

「わ、私は消されるんでしょーか……」

「映画の見すぎだ。そう簡単にカタギの人間に手は出さない」

カタギ……て、私？

「まあ、お前はもうカタギじゃないが」

頭で理解する前に否定されたが、なんとなく一気に心臓が体の奥まで沈み込んだように感じた。

「私……人を刺した、んですけど……」

忘れちゃいけない。

私は、恋人を殺したんだ……………。

「お前は何か勘違いをしているようだが、高菅蓮司は自分で死んだ」

「嘘！だって私が……………」

「お前が出ていったあと、自分で刺した。傷が2ヶ所にあった」

そんな……………なんで……………？

力無くただ涙を流す私に近寄るでもなく、淡々と語り続ける。

「密輸の件で挙げられたが、書類送検で終わった」

「れんじ……………」

「お前は、今カタギに戻れば殺人未遂で逮捕される。……高菅蓮司を追ってた奴らにも、すでに顔と名前は割れてる」

さっきの追われた記憶が頭をよぎり、恐怖で身震いをした。

これから、ずっと殺されるか殺されないかの狭間で生きなきゃいけないの……？

会社に、家族に、何か影響ないの……？

私のせいで誰かが殺されたりなんかしたら……

「ただし、一つだけ免れる方法がある」

そこで一旦言葉を切り、へたりこんだままの私の傍まで歩いてきて、しゃがみこんだ。

「一度、死ねばいい」

Mission 4 : 契約 - 1

「……………は」

「だから、”一度”死ねばいいんだよ」

「はぁ……………死ぬのは一回きりだと思っんですけど……………」

「あたり前だ」

はぁ？

この男の言っている意味がわからない。

顔がイイだけで、実はもしかしてちょっとイッちゃってる……………？

「唯一の方法は、

” 戸籍上 ” 死亡したことにする 「

「 戸籍上、お前は交通事故で死んだ。そうすれば、お前の存在はこの世から消滅する。 ” お前の名前が ” という意味だが 「

発想の奇抜さに頭が回らない。

「 そんなので、本当にもう追われることはなくなるの? 「

「 『 そんなの 』 って、お前は この世にいない存在になるんだ。意味がわかってるのか? 「

この世にいない存在……………

会社の名簿からも家族の戸籍からも、私の名前が消える……………? 「



なんでそこまでする必要があるの……………

「どこかに手掛かりが残っていたら、奴らは必ず見つけだして追ってくる。そうすれば家族も、友達も、交遊関係を全て調べられて標的にされる。…………お前を殺すまで」

そんな……………

殺すとか死ぬとか、今まで全くの無関係だった言葉を、この男は平気で口にする。

昨日までは、そんな言葉はテレビや映画の中でだけのものだと思っていた。

なのに、突然そんなことを言われても、頭がついていかない。

「お前がもしそうしたいと言うなら、手を回して死亡診断書を書かせる。ただ………」

「匿うかわりに、手を貸してほしい。………」  
『黒』の、エージェン  
トになれ。…これが条件だ」

## Mission 4 : 契約 - 2

30分後、私は契約書にサインをしていた。

「……………今からお前は『黒』のエージェントだ。戸籍のことは、こ  
つちで手配しておく」

「……………」

返事なんかできる精神状態ではなかった。

この一晩で、私は人生を大きく変えてしまったのだから。

恋人を殺し、

戸籍上で死に、

闇社会の組織に加担してしまった。

この期に及んでも、まだ虚偽のこのように思える。

どこからか突然カメラとマイクを持った人たちが現れて、

『映画のエキストラ出演ありがとうございましたー』

なんて言ったりだとか。

違う部屋で隠しカメラを通して友達が見ていて、

明日の朝になって、

『実はドッキリでしたー！びっくりした？』

なんて笑ったりだとか。

そんな淡い期待が浮かんでは消え、消えては浮かぶ。

それに、蓮司がまた笑顔で私の前に現れて、

ウエディングドレスを着た私と白いタキシードの蓮司が、はにかみながらライスシャワー浴びている光景が何度も頭の中を過ぎり、

涙なんてとくに涸れていた。

「しばらくは、うちの経営するマンションで生活したほうがいい。部屋の家具は、あとで運ばせる」

ゆっくり首を振る。

どんな妄想をしたって、蓮司は死んだんだと、頭の片隅ではわかっている。

蓮司と過ごした日々の思い出が詰まったあの部屋の家具なんか、あったってその部屋に帰ってくる蓮司はもういない。

何も言わずに下を向く私を哀れんでか、彼は、

「……………どうしても会っておきたい人がいるなら、今夜までならその携帯電話で話すことを許可する。直接会うことは危険だが、会話なら……………まあかまわないだろう。明日には解約するが」

と言った。

それがどれほど危険な賭けなのかは、彼の表情を見ていればわかる。

盗聴されていれば、間違いなく狙いが家族や友達に移るのだ。

そんなことが、絶対にあってはならない。

人生を狂わされるのは、私一人でいい。

私は、長い沈黙を破り、呟いた。

「早く手続きを」

明け方近くになって、案内されたマンションの一室に入った。

薄暗いベージュの壁は今にも倒壊しそうで、10畳ほどの部屋も、やはりどこか薄暗かった。

……………どうでもいい。

むしろ、これくらいの明るさのほうが、これから始まる闇社会での生活に、ふさわしいといえるかもしれない。

『もう、カタギじゃないが』

あの男の言葉が蘇る。

……………そう、今までいた、光のさす真っ白な世界には、もう戻れないのだ。



自分の幸せをあたり前に求める暮らしは、私にはもう残されてはいないのだ。

何も無い床に俯し、目を閉じる。

今までの”私”という存在を、振り切るかのように。

## M i s s i o n 5 : 訓練 - 1

「おはようございます」

朝目覚めると、枕元に昨日私を会社に連れてきた人がいた。

紅茶を出してくれた、あの初老の男性だ。

現在自分がおかれている状況を理解するのにはしばらくかかり、ようやく頭がおいついたところで声を上げた。

「なんで、あなたがここに……ッ?!」

驚くのも無理はない。

昨日すっかり玄関の鍵をかけて寝たのに、朝目を開けると枕元で正座しているスーツ姿の彼がいたのだから。

「ご挨拶が遅れまして、申し訳ございません。レイ様の秘書をして  
おります、春日と申します。仮の名、という意味ですが」

相変わらず無表情で淡々と話す。

「仮の名？」

「……私もあなたと同じ身ですから」

……どづいつことだろう……。

私と同じってことは……彼も戸籍上はもういない人……？

「レイ様より、お目覚めになられたら会社まで来るようにと申し付  
けられております。初日ということで、朝食は用意させていただきました。  
……自殺、なんてされては困りますし」

無表情のまま、ものすごいことを口にする人だ。

上品な物腰はどこか上流な雰囲気だが、やはり彼も闇社会の人間だ。全く隙が見当たらない。

まだ昨日の疲れが残っているかんじはしたが、とりあえず彼には逆らわないほうが良さそうだ。

「よく休めたか」

昨夜と同じ最上階の部屋に通されると、昨日の男がこちらに向きかえった。

「……あまり」

「まあいい。こちらへ」

言われたとおり奥の机のそばに寄ると、布の上に何丁かの拳銃が置かれていた。

大小様々だが、どれもみな一様に、黒く鈍い光を放っていた。

「この中から、好きなのを一つ選べ」

好きなもの、って………どれが何かわかるはずがない。

そもそも拳銃なんて、生で見たことすらないのだ。

私が黙ったまま突っ立っていると、

「………選べるわけないか。全部に弾が1つずつ入っているから、あのボードに向かって撃ってみる」

「はッ！？う、撃つんですか？」

「いらんことは気にするな。早く撃て」

撃て、って言われても……

仕方なく、手前にあった1つを掴み、ボードに向かって引き金を引いた。

と、腕に走った衝撃に驚き、思わず落としてしまった。

男は黙ってそれを拾い、代わりに違う拳銃を差し出した。

今度は少しマシだったが、それでも的からは大きく外れている。

3つめも4つめも、やはり同じ結果だった。

男は短い溜め息をつきながら、最後の1つを渡してきた。

これもどうせ外れるんだろう。

そう思いながら、初めよりかは少し慣れた動きで引き金を引く。

と、なんと弾はまっすぐ飛び、的に当たりはしなかったものの、実に惜しいところに跡を残したのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3467e/>

---

極夜

2011年1月16日07時50分発行